

凍結融解胚移植における内膜調節法別の臨床成績の比較検討

藤岡聡子¹⁾ 小林亮太¹⁾ 井田守¹⁾ 福田愛作¹⁾ 森本義晴²⁾
IVF 大阪クリニック¹⁾ HORAC グランフロント大阪クリニック²⁾

【目的】わが国では凍結融解胚移植の内膜調節法として主にホルモン補充周期が用いられているが、当院ではホルモン製剤の副作用や患者の薬剤服用に関する負担を考え主に自然排卵周期を用いている。今回内膜調節法の違いによる臨床成績を検討した。

【方法】2013年1月から2018年10月に凍結融解胚移植を行った9381周期を対象に、自然排卵周期群(NC群)とホルモン補充周期群(HRC群)の臨床妊娠率を年齢別、移植胚別に比較検討した。流産率は年齢因子を考慮し40歳未満の良好胚盤胞単一胚移植で妊娠した1282周期、および分割期胚単一胚移植で妊娠した270周期で検討した。

【結果】全体の臨床妊娠率はNC群で34.7%、HRC群で31.1% ($P < 0.05$) とNC群で有意に高率であった。年齢別では40歳未満の臨床妊娠率はNC群 vs HRC群で43.8% vs 41.8% ($P = 0.15$)、40歳以上で23.0% vs 18.3% ($P < 0.05$) と40歳以上群で有意に高率であった。移植胚別では、良好胚盤胞単一移植での妊娠率は40歳未満のNC群 vs HRC群で54.8% vs 53.5% ($P = 0.531$)、40歳以上でもNC群 vs HRC群で35.9% vs 33.7% ($P = 0.538$) と両群に有意差を認めなかった。分割期胚単一移植では40歳未満のNC群 vs HRC群で25.7% vs 30.5% ($P = 0.068$)、40歳以上ではNC群 vs HRC群で17.0% vs 10.5% ($P < 0.05$) と40歳以上群ではNC群で有意に高率であった。流産率は胚盤胞移植でNC群 vs HRC群11.1% vs 11.5% ($P = 0.847$)、分割期胚移植で21.2% vs 27.0% ($P = 0.304$) と両群で有意差を認めなかった。

【考察】40歳以上群の全体および分割期胚移植での妊娠率がNC群で有意に高かったことから自然排卵が期待できる症例では積極的に自然排卵周期を選択してよいことが示唆された。40歳未満群の妊娠率や流産率については両群間で有意差を認めなかったが、自然排卵周期ではホルモン剤使用による血栓症発症のリスクを回避できるメリットがある。PCOSや卵巣機能低下など卵胞発育や排卵が困難な症例もあるので、本人の希望なども考慮し内膜調整法を個別化し選択していくことが重要であると考えられる。